

県中教研 保健体育部会だより

第 35 号

発行日 和令2年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 吉岡 徹
題 字 金山 泰仁 先生

主体的に学ぶ姿を求めて

指導主事 北島由紀子

「友達と協力して、最後まで走ることができて、大きな達成感を得ることができました。」

長距離走を苦手としているAさんが、リレー形式で仲間と4kmを走る授業を振り返ったときの言葉です。額に汗しながら眩しい笑顔で話す姿が印象的でした。

育成を目指す資質・能力の一つである「学びに向かう力、人間性等」は、「主体的に学習に取り組む態度」を観点として評価します。生徒の主体性が発揮される授業では、教師のきめ細かな手立てにより、目標を自己決定したり、対話を通じて真剣に仲間と関わったりする姿が見られます。Aさんのチームでも、与えられた条件のもと、チームの仲間と相談を重ね、一人の走る距離や走順、練習方法等を決めていったことが推察されます。

また、この授業では生徒の様子を見守り、タイミングよく声をかける教師の姿がありました。「どんなペース配分で走ろうと思っている?」「今日はどんな工夫をして走るの?」等、生徒自身の気付きや自己決定を促しておられました。生徒の話に傾聴したり、承認したりする教師の姿勢も、主体性を引き出す大きな手立てとなっていました。

Aさんは、チームのために精一杯できることをしたいと強く願い、走る距離を短くしませんでした。教師の手立てや仲間との関わりを通して、粘り強く取り組み、自らの学習を調整しようとする主体的な態度を身に付けたと考えられます。チームの仲間も、教師と一つになってAさんの目標達成に向け、大きな声援を送っていました。

主体的に取り組む態度の育成には、上記のような配慮のもと、生徒が系統的・継続的に学習経験を積み重ねられるようにすることが大切です。だからこそ、教師が協働し、効果的な指導方法を共有することが求められます。中教研には、その中核的な役割が期待されています。

(西部教育事務所)

令和2年度へ向けて

部長 吉岡 徹

今年度の研究は、「動きの質を高めることができるようにICTの活用方法を工夫する。」「自己の特性に応じた、する・みる・支える・知るの多様な関わりができる指導過程を工夫する。」に主眼を置き、研究を行った。

各地区では、積極的にICTを使った授業が開かれたことと、グループでの教え合いや励まし合い、発見ができる場の設定が工夫された授業があったことが成果としてあげられる。また、協議会では授業の成果や課題について熱心に意見交換がされた。

今後の課題は、①ICTの活用は、撮影機器としての活用はしているが、それ以外の活用については、教師も生徒も使い方のスキルを積み重ねることが必要。ということと、②教師の説明や学習カードへの記入の時間が多く、生徒の運動量が十分確保できていないということである。

東京オリンピック・パラリンピック実施が目前に迫り、社会の生涯スポーツへの関心、生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現の機運が高まってきた今、令和2年度は、保健体育部会の研究の3か年計画最終年度であり、それに備え「保健体育部会 令和2年度研究計画(案)」では新たに、①運動量の確保と学び合いの充実、②振り返りの充実、この2つを重点として掲げ、研究を進めていく予定である。新学習指導要領の全面実施の準備とともに、令和2年度の中教研保健体育部会の研究の準備もお願いする次第である。

(高・南星中)

第63回 研究大会の取組

新 川 地 区

2年 球技「バレーボール」

指導者 橘 豪俊

「チームの特徴を生かした三段攻撃を成功させよう」を学習課題に、2年生男女共習による球技「バレーボール」の授業が提案された。

三段攻撃を成功させるために、サーブレシーブを確実にセッターに返す練習、スパイク



の助走とタイミングを合わせる練習、トスを正確に上げる練習等、課題を解決するための練習をチーム毎に選択し、実践した。その後、練習ゲームに取り組み、課題が解決されているかの検証を行った。振り返りでは、生徒同士で動きの確認をしたり、改善点を指摘し合ったりするだけでなく、声かけ等の雰囲気づくりについても活発な話し合いが行われた。

部会協議①では、「学び合い」「ICTの活用」「ルールの工夫」「雰囲気づくり」等について活発な意見交換が行われた。

竹内康彦主任指導主事（東部教育事務所）からは、安全面、学習形態や学習内容、タイムマネジメント等について助言をいただいた。また、授業においては、運動が得意な生徒だけでなく、一生懸命応援する生徒や、率先して準備を行う生徒等も取り上げて賞賛することで、スポーツには「する」ばかりでなく「見る」「支える」「知る」という多様な関わり方があることを実感させてほしいと助言をいただいた。

部会協議②では、授業力向上アドバイザーの佐藤豊先生より、学習指導要領の改訂のポイントや評価の方法について具体例を挙げながら指導していただいた。また、授業では、教師の発問により、思考・判断を促す量を増やし、生徒に考える力を身に付けさせるとともに、どんな生徒になってほしいか、その姿をイメージして教材研究に励むよう助言をいただいた。

丸山 峻史（黒・桜井中）

富 山 地 区

3年 武道「剣道」

指導者 末上 裕也

「決められた条件の中で、有効打突を決めるにはどのような工夫をしたらよいだろうか。」を学習課題に、3年生男子による武道「剣道」の授業が提案された。授業は、課題解決のためのグループ練習から始まった。続いて、条件付きの攻防（試合）を通して、どのような動きが有効打突につながるかを見付け、実践で生かすことができるようにすることを課題とした。試合では審判、動画撮影、観察の役割分担を行い、各々が大切な役割を担った。学び合いの場面では、動画を参考にしたり、観察していた生徒の意見を聴いたりしながら、工夫できた点や改善点等を確認した。



部会協議では、フリーカード方式で集まった意見を時系列に沿って質疑応答や意見交換を行った。「話し合いと運動量の確保は適切だったか」「話し合いは、困っている生徒を対象にしてもよかったのではないか」等、多くの意見が出された。

豊田真一指導主事（東部教育事務所）からは、「剣道を実施している学校は富山市内には3校しかないが、本時の学習内容は柔道にも通じる場所があり、参考になる学びが多かった」「決められた条件で試合をすることは、スモールステップの積み重ねである。今後、生徒が考えた条件の下で練習を重ねると、より深い学びにつながるのではないか」「生徒同士の学び合いを取り入れる際、生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか考えることが大切である。学習ノートは、学習のねらいや学習過程等が明確に示されており、何を、どのように学び、何ができるようになったかが振り返りやすいものに洗練されていた」等、貴重な助言をいただいた。

藤井 明代（富・速星中）

第63回 研究大会の取組

高岡地区

(高・福岡中)

1年 陸上競技「リレー」

指導者 竹山 卓哉

「グループでアドバイスをし合い、タイムを向上させよう。」という課題設定をして、1学年男女共習でリレーの授業が提案された。

今回の授業では、単元の評価規準に、新学習指導要領の3つの観点を先行して採用し、



全面実施へ向けた取組が行われた。また、単元の全体計画も新学習指導要領に沿った提示であった。多くの参加者から、「全面実施へ向けての道筋が分かった。」との感想がでた。



成果は、生徒が自分たちで課題を見つけてチーム練習を組み立て、その課題についてグループで話し合いながら解決していたことである。一方、本時では練習やレースの様子をタブレットを使用して撮影していたが、撮影する角度や場面の工夫の仕方について事前指導をしておくなど、どのようにしてICTをより効果的に活用していくかが今後の課題としてあげられた。

吉尾徹指導主事（西部教育事務所）からは、「能力差のある生徒でチームを組んだことで、関わり合いの中から生徒の成長が育まれた。ICTの活用については、必要と感じたら活用するのがベストだ。」という助言をいただいた。

吉岡 徹（高・南星中）

砺波地区

(小・石動中)

2年 陸上競技「長距離走」

指導者 奥村 眞宏

「自分の役割を果たし、チームで20周を走り切ろう」を学習課題に、2年生男女共習による長距離走の授業が提案された。



前時までの学習を

生かして、チームや個人の目標タイムやペースを設定するとともに、チームで作戦を立てて、個人の走る周回数を決めて、競走の要素も取り入れながら、運動の特性に触れることをねらいとする活動であった。

部会協議①では、運動量の確保やグループ、個人の目標がより意識されるものとなるよう設定す



ること、脈拍数や心拍数を測定するなどして強度を確認すること、一人一人の満足感を引き出すための工夫について意見が出された。

北島由紀子指導主事（西部教育事務所）からは、運動量や長距離としての距離の設定等、様々なとらえ方があることを踏まえた上で、達成と競走という運動の特性に触れながら、リレー形式で楽しさを味わえたこと、体育ならではの「見合い、関わり合い、教え合い、励まし合い」が意図的に授業に仕込まれていたこと、生徒の内側からの意欲を引き出す取組であったことなどを話していただいた。

部会協議②では、新学習指導要領の実施に向け、評価規準や年間指導計画の作成における留意点やポイントについて、解説と演習を踏まえながら指導していただくとともに、学校の強みを生かすことや男女共習の工夫、評価ができる授業を仕組むことなど、多くの実践的な助言をいただいた。

太田 初美（小・石動中）

研 修 報 告

報告者 富山大学人間発達科学部附属中学校
教諭 宮腰 卓央

令和元年10月11日、横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校研究発表会が開催された。

【保健体育科の取組】

○公開授業 2年 ネット型「バレーボール」

男女共習で「チームで連携して攻撃を組み立てる」ことをねらいとして授業が展開された。特に「準備運動」と「ゲームの振り返り」、「自由練習」が生徒たちの学習意欲を高めており、『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けて参考になった。

【①生徒の主体性を高める「準備運動」】

バレーボールに「夢中・没頭」できる動きを取り入れることで、運動の苦手な生徒にも分かりやすく、簡単に取り組める工夫が見られた。この形態は、小学校でも取り入れており、9年間を通して、基本となる動きが徐々に身に付く感覚を味わわせるねらいがある。

ア 「トスDEシュート」

ペアが下からトスしたボールをオーバーハンドパスでバスケットゴールにシュートする。

イ 「フラフープDEレシーブ」

ペアが逆回転をかけて転がしたフラフープをアンダーハンドパスで拾い上げる。

ウ 「タオルボールアタック」

縛ったタオルの先端をボールに見立て、自分で放り上げたタオルをアタックする。

【②生徒の対話を促す「ゲームの振り返り」】

「チームで連携して攻撃を組み立てる」ために、前時の課題がどのように改善されたかを中心に、撮影動画を参考にしながら積極的に話し合う姿が見られた。教師が各チームの課題を把握し、適宜助言することで、視点がぶれない話し合いが展開された。また、他にはどのような攻撃方法が考えられるか、攻撃に直接関わっていない生徒はどのような動きが想定されるかなどを話し合うことで、次戦への活動意欲を高めていた。

【③学びを深める「自由練習」】

ゲームを通して浮き彫りになった課題や話し合いで膨らませた動きのイメージを自由に仲間と共に試行錯誤する時間が確保されていたことで、繰り返し挑戦したり、動きを調整したりする姿が多く見られた。「イメージ」と「動き」をつなげる有効な学びの場であると感じた。

フレッシュさん



1年目を振り返って

城山中学校 教諭 越前 匠真
年度当初は、先輩教員の授業を真似したり、自分なりに工夫をしたりしながら授業をしていました。しかし、満足のいく授業がなかなかできず、先輩教員との差を感じ、自信がもてないこともありました。それでも挑戦をやめるのは早すぎると自分に言い聞かせました。先輩教員のアドバイスをもらったり、生徒にどんな授業してほしいか聞いてみたりして、周囲の発想を積極的に活用しながら授業を改善し続けました。すると生徒から「先生できた!」や「先生のおかげ!」などのポジティブな言葉が出るようになったのです。私はこれらの言葉にとっても救われ、もっと生徒が満足できる授業をしたいと思うようになりました。

1年間を振り返ると、もっと生徒のためにできたことがあったのではないかと反省しています。来年度は、生徒がより保健体育に関心をもつような授業を実践するため、周囲の意見に耳を傾けることを心がけるなど、精進していきます。



1年目を振り返って

高岡市立福岡中学校 渡邊 亜仁
生まれて初めて故郷の新潟を離れ、富山県で憧れの教員生活をスタートすることになった。地元で講師経験はあったが、新米教師として生徒の前に立った4月は、緊張と不安でいっぱいであった。

そんな中、1回目の授業で、私は生徒たちに思いを伝えた。それは保健体育の授業の「楽しさ」について。「できなかったことが一つでもできるようになったときに『楽しい』と思える。保健体育の授業では、そういう体験を積み重ねてほしい。」と。

10月。運動がとても苦手で、体育は嫌いだと言っていたある女子生徒がマット運動の授業の振り返りでこう話してくれた。「今までできなかった倒立前転ができるようになった。最近、体育が楽しいです。」私が目指していることを体現してくれたのが何より嬉しかった。

まだまだ、授業でやりたいことや改善していきたい課題が山のようにある。研鑽を積み、規律ある中にも全員が「楽しい」と思える保健体育の授業を実践していきたい。